7

都市のなかの人生ターミナル

トーキョー・銭湯考

文筆家
小野美由紀

1985年生まれ。慶応義塾大学フランス文学専攻卒。恋愛や対人関係、家族についてのブログやコラムが人気。2月にデビュー作エッセイ集「傷口から人生。〜メンヘラが就活して失敗したら生きるのが面白くなった」（幻冬舎）を発売。著書に、原子力エネルギーの歴史について描いた絵本「ひかりのりゅう」（絵本塾出版）。

【第一部】

銭湯生活のすゝめ

若い頃、風呂の無い家に住んでいる時があった。

その頃の私は、ライターとして独立したばかり。金もなければコネもない。毎日一人で、ひっそりと家の中で原稿を書き続ける日々だった。

午後4時、少し早い、冬の夕暮れに町並みが霞んで見えるころ、洗面器にタオルをかけてアパートを出る。下校途中の小学生の群れを抜けて商店街へ。路地裏の紺色の薄闇の中に、銭湯の白い看板の灯がぼんやりと佇んでいる。一歩、一歩と近づくたび、湯のやわらかい匂いが濃くなり、仕事で凝り固まった頭が、夜と昼のあわいに浮かぶ町の、少し螺子の外れたような気分に馴染んでくる。

フリーランスとして独立、と言えば聞こえがいいけれど、その時の私は、体調を崩して仕事をやめ、ほぼなし崩し的にフリーとして生きざるを得なくなったような感じだった。自信はゼロに等しかった。社会の中に自分が挟まる余地など、どこにもないような気がした。はじきだされた宇宙の中で、ただ一人、命綱もなく、漂っているような感じだった。

そんな時に、風呂のない家に住もう、と思い立ったのは全くの偶然だった。学生時代、京都の友人の家に長く滞在してぶらぶらしていた時の銭湯通いを思い出したのだ。それは楽しい思い出だった。

銭湯に行く時間、30分から1時間のその時間を起点にして、1日のスケジュールを組み立ててみよう。

そう思い、私はすぐに物件探しをはじめた。すりきれた日常に、わずかな希望が生まれた。

不動産屋さんは、多少戸惑いながらも、すぐに私の望みにぴったりの家を探し出してくれた。渋谷からも原宿からも歩いてゆけ、地下鉄の駅からは徒歩2分。1k10畳で家賃4万5000円。徒歩3分の距離に2つも銭湯がある。そんな場所を見つけられたのは全くの幸運だった。暮らしてみるまでは、「さすがに風呂が家にないのは大変かも」とか「一ヶ月に銭湯代が12000円もかかるのはどうか」とかいろいろ心配していたが、いざ始めてみると、なんてことはない。風呂をアウトソーシングしたと思えばいいのだ。この条件でさらに風呂付きの家を探すとなると、さらに家賃は最低でも2万円ほど上がるだろう。一ヶ月12000円で、いつでも湯の湧いている、巨大な風呂が手に入ると思えば、ずいぶんとお得な選択に思えた。浴槽を洗ったり、換気に気を遣う必要がないのもありがたい。銭湯の営業時間は15時から深夜1時までである。午前中に風呂に入れないこと、飲み会などの時には閉店に間に合わず、風呂に入れないことがあるのは多少痛かったが、この頃の私は暇を持て余し

ていたので、大した損は被らずに済んだ。
それだけではない。

銭湯生活をはじめてから実感した恩恵は、そうした金銭的なメリット以上に大きなものだった。

銭湯は私にとって、「他人」と出会う場所だった。

余計な肉が削ぎ落ちて、すっかり骨と皮になってしまった、近所の商店街のおばあちゃんたち。代々木公園を走り終えた、溌剌とした笑顔の外国人ランナー。部活帰りの高校生がきゃあきゃあ騒ぎながら、ラクロスのスティックを脱衣所の棚の上におしこんでいる。深夜になれば、店を上がった後のホステスさんたちが、ハデなキャミソールをけだるそうに床に脱ぎ落とす。裸体になったとたん、日常を覆い尽くす緊張の膜が取れ落ちて、彼らはただの「他人」になる。

「あそこのテナントに入った店のオーナーはすこぶる感じが悪い」とか「あそこに入った店は半年と持たずに潰れる」とか、ご近所同士のうわさ話を盗み聞きするのも、他人の生の暮らしに触れているようで心地がよかった。

もうもうとした、乳白色の湯気にくるみこまれる、数々の裸体。衣服を脱ぐだけで、プライベートゾーンがぐっと狭くなり、それだけで、無言の連帯が生まれる。
髪を洗う30前後の女性の、膝の上でつぶれる、乳白色のつるりとした乳房。子供たちの、小枝のような性の分からない裸体。家族のために養分をすっかり使い果たしてしまい、あとは骨と皮だけになって、その間にわずかに安らぎの残る老婆の身体。それらが同じ湯気の中でないまぜになり、てんでばらばらの動きをし、しかし無言のうちに、互いに気遣いあい、いたわりあって、この洗い場と言う空間の質を養っている。
銭湯は私にとって、他人の命に触れる場所だった。電車の中で、仕事先で、街で、これだけ多くの人間に揉まれて生きているのに、これほどまでに他人の命を密に感じられる場所を、私はほかに知らない。

不思議だな。この前まで、私は他人との関係にすり減って、消耗して、苦しんでいたのに。今は、他人がいることがこんなにもありがたい。もしかしたら、私は本当に、他人と関わっていたわけではないのかもしれない。自分の世界にただ閉じこもったまま、相手のことを感じようともせず、「付き合いに悩んでいる」ふりをしていただけなのかもしれない。

いったん、身体に染み付いた社会性を剥ぎ落とすこと。そのことが逆に、私の社会性を取り戻させてくれた。銭湯通いをはじめて四ヶ月が経ち、春が来る頃、ようやく私は次のステップに進み、仕事をリスタートさせた。

今でも私は、仕事で煮詰まると、銭湯へ行く。そうしてそのたびに、思考の鍋の中、自分をぐらぐらと煮詰めて追いやっていることに気づく。他人に囲まれたこの世界で生きていること、その実感が、素直に、湯の温度とともに身体に染み渡ってくる。
自分自身を見つめているだけでは、他人との関わり方は分からない。それよりも、いっとき自分を手放し、空白の時間に身をゆだねること。そうしているうち、もうもうと立ちこめる湯気の中に、私はふいに、自分と社会の小さな交差点を見つける。

【第二部】

銭湯は都市の「官能空間」

―地域のターミナルとしての銭湯の可能性―

ここからは、都市部の銭湯をとりまく現況と、銭湯の文化的・地域的な価値について述べてみたい。

東京都には現在、約660軒の銭湯がある。

岸本葉子「江戸の人になってみる」（晶文社14年）を読むと、江戸時代、銭湯は江戸の町民にとって、身体を清める生活の場であると同時に、大事な憩いの場であったことが伺える。火事を恐れ、内風呂が禁止されていたこの時代、銭湯は庶民だけではなく、下級武士も通い、大事な交流の場となっていた。女性は月に1度しか髪を洗わないにも関わらず、銭湯へは一日に2度も入ることがあったという。朝早くに、仕事帰りに、遊郭で遊んだあとに。日に何度も訪れ、人々はご近所との交流を深めた。

肩肘張らずに会話が出来、人の対流が起きる。単なる生活機能的な側面ではなく、多機能のコミュニティ・スペースとして。時代が変わった今も、銭湯はその価値を変わらずに持ち続けていると言ってよい。

また、地域住民のみならず、外国人留学生や、地方から出て来た学生にとって、銭湯は地域コミュニティにアクセスするための貴重な場だ。

「日本には広場みたいな場所がないのが違和感だったけど、銭湯に来てみたら、ここは広場だった。適度な距離感でコミュニケーションがあって、居心地が良い」（外国人留学生）

「地方から上京して来た学生が、銭湯通いを通じて、地域のコミュニティにとけ込んだり、障害を持つ人々や、十分な教育を受けられずに就労先に苦労していた人が、営業を手伝うことで、居場所を見つけたり。地域に住む、誰でもを受け入れてくれる場所って、あんまり今、ないですよね」（学生）

しかし、その銭湯は今、なんと1週間に1軒のペースで廃業しているという。

築88年、都内最古級の「月の湯」（扉写真P150）は、今年6月、その歴史に終止符を打った。解体された跡地には戸建て住宅が何軒か建つという。広大な土地を持つ銭湯は、都市の再開発やマンション建設には絶好の狙い目なのだろう。

内風呂所有率がほぼ100%となった現在において、銭湯は、経営者の高齢化や建物の老朽化、客足の減少、継ぎ手の不足などの要因により、創意工夫する間もなく

廃業に追い込まれているのが現状である。月の湯の常連には、年齢を問わず「家に風呂があるけど来る」「風呂友達ができるから来ている」という人も多かったのだが、こうした地域のコミュニティとしての役割は、肌感覚で受け継がれてきたものだからだろうか、なかなか可視化されにくい。再興しようにも、なにをどうしていいのか分からない、というオーナーが大半であり、地域の客の減少に手をこまねいている所が多い。

文京建築ユースは銭湯建築の断面図を保存するなど、建築物としての価値にも注目

こうした銭湯を保存する動きが、若い世代を中心に今、生まれはじめている。

「文京建築会ユース」は、文京区に住む、地域の建築関係者が集まる有志団体「文京建築会」の若手部門として2011年秋に発足。地域に隠れたコンテンツを掘り起こし、地域振興につなげる活動を行う中、地域文化の担い手としての銭湯に興味を惹かれ、現在では文京区の銭湯の保全とアーカイブ化（＝記録）に力を注いでいる。

なかでもひときわ熱心に活動しているのは、建築家であり、法政大学で建築教育に関わる栗生はるか（34）だ。

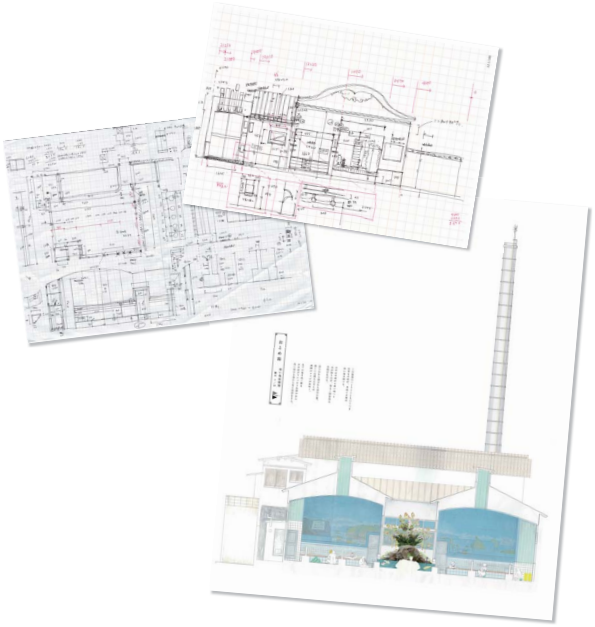
地域をアーカイブする「文京グラフィックス」の一環、文京区の全60体の狛犬を撮影しポストカード化。「絵はがきｄｅ狛犬めぐり」

「銭湯を中心に街を見ると、地域が深みのある感じで見えてくる」と彼女は言う。栗生らが銭湯の記録を始めた2013年、文京区には11軒の銭湯があったが、半年で2軒が休廃業、絶頂期の昭和43年には63軒あった銭湯が、2015年にはついに一桁の8軒となった（8月1日現在）。休廃業の流れが加速する今、彼女たちは現存する銭湯の営業維持の必要性を強く感じている。

「戦後からずっと続く銭湯は、昔のあの地域はこうで、とか、あのお店はこうで、などと言った、地域の歴史を知る人の集まる貴重な場所。よその土地から越してきた人でも、銭湯に行けば地域の情報が入ってくる。地域でそういう話がストックされる場所って、銭湯以外にはあまりない。どんな人たちが住んでいて、地域のつながりがあるかどうかとか、だいたい分かるような気がする」（栗生）

栗生は文京建築会ユースとして、これまで文京区の銭湯の魅力をなんとか対外発信するべく、様々な活動を行ってきた。昨年制作したパンフレット「文京の銭湯」は、文京区の全銭湯を、美しいグラフィックと文章で紹介した、無料の銭湯ガイドブック。ライフスタイル誌「KINFOLK」のようなデザインで、若者が思わず手に取りたくなるような佇まいをしている。

また、文京区内の不動産屋とも提携し、引っ越してくる人々に対して「あなたの銭湯はここですよ」と、銭湯の無料

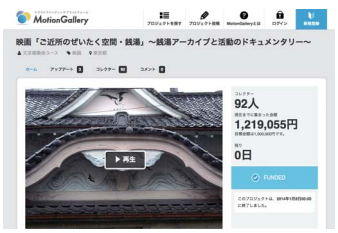


招待券を入居時に手渡している。各銭湯のパンフレットや招待券のデザインも、文京建築会ユース監修だ。

「学区みたいな感じで、小学校を中心に考えるように銭湯を中心に地域を考える仕組みを作りたい。銭湯が多い地域は暮らしやすく、住みやすいという印象を持ってもらえれば」（栗生）

銭湯を貴重な歴史資料としてアーカイブする動きにも、栗生らは力を入れている。

文京区千石にある「おとめ湯」は、2013年6月、その60年の歴史に終止符を打った。



「ご近所のぜいたく空間・銭湯」の制作過程映像はYouTubeで見られる。制作資金はクラウドファンディングで募った

おとめ湯はその内装の美しさで多くのファンを集めた銭湯である。浴場からガラス越しに眺められる店内中央の中庭には富士山の溶岩を土台に1本の大ツツジが生え、周囲にはみずみずしい緑が生い茂る。根元にはこんこんと湧き出る井戸水の池。色とりどりの鯉が優雅に泳ぐ。その様子は、洗い場から窓を通して水槽のように眺められる。髪を洗いながら、鯉と目が合う。そんなにも贅沢な空間が、この古びた建物の中にあるとは、足を踏み入れなければ知りもしないだろう。時を同じくして、彼らの活動に共鳴した人々が、この活動の過程を記録するアーカイブドキュメンタリー映画「ご近所のぜいたく空間・銭湯(仮題)」の製作に乗り出した。撮られた映像の一部はYouTubeなどで確認できる。

このドキュメンタリーでは、廃業前のおとめ湯の営業風景やご近所の様子、安心して客が湯船に浸かれるよう、毎日浴場をピカピカに磨き上げて来た経営者夫婦の裏の努力、営業最終日の常連のインタビューなど、銭湯がこれまで産み出して来た、街の風景がありのままに記録されている。湯上がりに、いつも長々と立ち話をしていた常連たちが「今度はいつ会えるのかねえ」と寂しそうに語る姿は印象的だ。

銭湯の廃業は、近隣にある老舗商店や美容室、タバコ屋にも影響を与える。銭湯目当てに通りかかる客でもっていた経営も、銭湯の廃業とともによりいっそう苦しい立場に置かれる。銭湯によって保たれている地域のつながり、コミュニティがあったからこそ、マンション化の波にも負けずにおとめ湯の主人はこれまで経営を続けて来たのだ。

2013年8、9月に行われたおとめ湯の見学会では、3時間で来場者が300人を超え、銭湯研究で著名な町田忍氏によるおとめ湯の魅力解説も実施された。見学会で初めて訪れ、「こんなにステキな場所があるなら、もっと早く来れば良かった！」と語るご近所さんの姿もあった。

また、都市の防災的な観点からも銭湯は評価できる。阪神大震災のおり、仮設住宅にはユニットバスしかなく、大

おとめ湯の、洗い場から鯉が覗ける水槽

「月の湯」最後の見学会の風景

勢の人が復旧したばかりの銭湯を利用したそうだ。心の癒しや人々とのつながりの提供の場として、災害時に銭湯は貴重な役割を果たすだろう。文京区の銭湯のほとんどは井戸水を利用しており、災害時には区と提携を結び、すみやかに利用できるよう井戸水確保をしている銭湯もある。

人と人との交歓が「官能」だとするなら、銭湯こそまさにリアルな場での人との交わりを作り出す「官能空間」だ。コミュニティサロンなど、人と話すことや関わりを持つことを意図して作られた場所は都内にも多々ある。しかし、呼吸をするような自然さで生活に密着した交流を促す、数少ない文化継承の場。「住みやすい街」「安心できる地域づくり」を考える時、銭湯はその象徴性も含めて無視できない存在なのではないだろうか。

しかし、こうした時代の波に黙って流され、廃業してゆく銭湯ばかりではない。なんとか工夫を凝らし、たくましくサバイバルしている銭湯も、都内には多数存在している。

たとえば、浅草の「蛇骨湯」。ここは外国人観光客にとっては一種の聖地と化しており、日本らしさに触れられる貴重な場所として、近くのユースホステルに泊まる外国人バックパッカーがこぞっておしかける。外国人人気の高まりを受け、東京都公衆浴場業生活衛生同業組合のホームページ「WEB1010」は、今年四月1日には全面リニューアル。日本語以外にも、英語、中国語、韓国語の3カ国語で、お風呂の簡単な歴史や入り方、マナーなどを紹介するほか、昔ながらの秤があるか、どんな背景画かなど、こだわりの検索も可能とした。

湯殿にも、英語、韓国語、東欧の語……と、各国の言語が飛び交い実ににぎやかだ。代々木八幡駅近くの「八幡湯」は土地柄か、ランナーにも開放的で、代々木公園を走り終えたグループが赤い顔をしながらシューズを靴箱に収める姿をよく見かける。表参道の「清水湯」も、ランニングステーションとして積極的に打ち出すほか、買い物帰りのおしゃれな若者が休憩がてら数多く立ち寄る。駅から近く、使い勝手が良いことも人気の秘密だろう。こういった銭湯は、地域に住む常連と地域外からわざわざ訪れる人々が混在し、人と人のほどよい距離感が保たれている。

また、台東区の寿湯は老舗の銭湯ながらも1日700人訪れる「お化け」銭湯である。その要因は、二代目オーナーの長沼 雄三さんによる創意工夫。

休憩所には缶詰とアルコールを販売する「缶詰バー」があり、湯上がりにビールを一杯、という客でいつも賑わって

いる。自転車置き場が整備され、サイクリストにも優しい。増設した露天風呂では、月に数度「チョコレート湯」「ワイン湯」などの変わり湯を行う。毎月、会報誌を作り常連に配布する。Facebookページをこまめに更新する。その他、他の銭湯から見ても参考にすべき先駆け事例がたくさんある。また、そうしたハード面以外にも、外国人やいちげんさんへの、長沼さんらスタッフによる細やかな気配り、地域民への声かけなど、接客姿勢が素晴らしく、口コミでファンを呼んでいる。寿湯は、特に地の利がなくとも、こうした工夫だけで十分に地域のコミュニティとして運営を維持できるというモデルケースであろう。

また、文京区「ふくの湯」は、マンション内に移築しビル型銭湯として経営を継続。移築時に大幅リニューアルし、カフェと見間違うような外観、美しいグラフィックアートのようなタイル絵など、デザイン性の高さで人気を呼ぶ。車いす対応など、バリアフリー化も万全。若い世代はもちろん、地域の常連にも愛されている。オープン時にはバンドを呼び、浴場でコンサートも開いた。こうした、銭湯の「空間」としての機能に注目する動きは各地で起きており、たとえば映像制作を通じてまちづくりの推進を行っているNPO法人「ワップフィルム」は、銭湯で映画の上映会をしたり、イベントを開催するなど、浴場として以外の活用も行っている。

このように、地域のみならず、地域外からも客を集める「サバイブ力」の高い銭湯は、生活の場としての機能だけではなく、「レジャー施設」、「観光施設」、買い物帰りに寄れる休憩所、またランニングステーションとしての機能など、さまざまな機能を複合的に満たすことで、結果としてその根底にある「地域のコミュニティとしての機能」をも保持し続けていることがわかる。こうしたハイブリッド化が、今後の銭湯の存続の鍵となることは想像に難くない。

文京建築会ユースも、浴場組合と提携し、地域交流サロンとしての活動提案を進めたり、海外向けのホームページ作成を進めるなど、各銭湯が地域のビジネスとしてサバイバルしてゆく道を模索中だ。

「銭湯は地域の象徴としての価値があるもの。これだけ広大な敷地を持っていて、住宅街の真ん中にあって、ネットワークの拠点になるものは、他に変わるものがない。なくなることで地域にも打撃がある。ぜひとも、存続活用しないといけない。銭湯が、地域の拠点としてクリエイティブに使われ出したら東京も変わるはず」（栗生）